

近世のはじまり

この程、市史第4巻近世資料を刊行しました。日本史で近世といいますと江戸時代の印象が強いのですが、社会の基本的な仕組みの多くは豊臣秀吉のもとで整えられました。たとえば全国の土地の公的な収穫高（石高）^{こくだか}を統一的に把握し、石高をもとに領地をあてがった家臣を大名として派遣し、地域を支配させるといった制度はこの時に始まります。

全国の土地を調査して石高と耕作者（納税義務者）を把握する作業は太閤検地と呼ばれ、近世の幕開けとして画期的な意味を持ちました。それまでは一つの土地に何人もの領主がおり、領主の数だけ税があるような状態でした。それを秀吉は太閤検地で一挙に統一したのです。これは当時の人々にとっても革命的な出来事であったと思われま



木器村検地帳(右。市指定有形文化財)

「頭役帳」の文禄3(1594)年の項に記された「検地有」という3文字は、簡潔なだけにかえってその重大さが伝わります（第3巻古代・中世資料参照）。

太閤検地の結果を村単位で一筆ごとに記録した帳面を、太閤検地帳と呼びます。市域の場合、全域を対象とした検地は太閤検地が最初で最後であったとみられます。したがって江戸時代の市域を支配した三田藩と麻田藩は、いずれも公式には約270年間にもわたり太閤検地の数字を引き継いでいました。ただし三田藩の場合は、太閤検地による石高を非公式に約1.5倍した数値をもとに藩政の運営がなされました。このことが裏付けられたのは今回の近世資料編さんの大きな成果のひとつです。いずれにしても太閤検地帳は、近世を通じて市域では特に重要な意味を持っていたはずですが、現在のところその原本は2ヵ村、江戸時代の写しが3ヵ村分見つかっているだけです。今回はそのうち2点をはじめて全文掲載しました。一見単調な記録ですが、戦国時代の名残を伝える地名や人名は興味深いですし、数字を集計することで当時の村の構造がうかがえる貴重な史料です。